

福竜丸だより

— 都立・第五福竜丸展示館ニュース —

(財) 第五福竜丸平和協会
 〒136 東京都江東区夢の島3-2
 都立・第五福竜丸展示館内
 電話 (521) 8494



“子どもたちの将来のため”と、放射能の影響を恐れ、5月末、集団移住したロンゲラップの島民たち (撮影=豊崎博光氏)。

故郷のロンゲラップ島を出る日、島は夜明け前から雨が降った。ときおり激しく降る雨は、トタン屋根をつき破らんばかりだった。朝の雨は冷たく、起きだしてきた島民たちは身をすくめた。朝食は、砂糖を少し入れた熱い紅茶一杯だけだった。どの家の食料もすでに底をついていた。降りつづく雨の中、移住は、トタンやベニヤ板など解体した家の資材の積み出しから始まった。移住地メジャト島(クエゼリン環礁北西端の島)は無人島で何も無い。島民たちは自分たちの家を解体して持っていかなければならなかった。

昼ごろ、雨雲が西に去ると、ぬけるような青空とともに太平洋特有の灼熱の陽光が射し出した。別れのセレモニーは行なわれなかった。新しい、きれいな服を着てはしゃぐ子どもたちとは対照的に、大人たちは黙々と小舟に分乗していった。午後六時半、夕暮れの中を移住船は静かにロンゲラップ環礁を離れ、百九十キロ南の移住地に向かった。無人島となったロンゲラップには、教会と墓、そして数十匹の豚と鶏が残された。

△文=豊崎博光氏。アサヒグラフ七月十一日号より抜粋▽

来館者の声から

私は焼津に生まれ育ってきまして、福竜丸被爆事件について、どんな事件なのかあまり知りませんでした。焼津の人間として恥しいと思われるかもしれませんが、実際私達の世代では、いくら焼津の人間とは言っても、知らない人は多いのではないかと思います。今から三十年前位の重大な忘れてはならない事件なのに、風化しつつある問題となっているのではないのでしょうか。私は焼津の人間の

責任として、この事件を少しでも多くの人に知ってもらい、そして自分自身でもよく知ることが大切だと考えました。そこで卒論のテーマとしてこの事件をとりあげることとし、今日この展示館を見学に来ました。この研究のきっかけとして見学させていただきまして、資料、写真などを見ていて涙がでる思いでした。やはり、この事件の悲惨さ、重大さを人々に訴えることは平和な世界へ進む上で大切なことだと改めて実感しました。どんな卒論になるかはわかりませんが、平和への願いをこめてこのテーマにとりくんできてほしいと思います(焼津市東小川 長谷川泉)。

きょう ここへ来たこと いったら ちゃんと わかるかな。それまで 何も起きませんでした。(一才三ヶ月 代筆 小林初根)。

＊

ぼくたちは、ここへくるまで戦争、原水爆でうしなった人などしりませんでした。ぼくたちはここにきて、核のおそろしさ、戦争のむごさをしみじみと味わいました。ぼくたちはこれをきっかけに高校、社会に出て核を作らざるをまっこうから反対し、戦争のないそして争いのない世界を造りたいと思います(小松川三中、清水、高原、松野、堀沢)。

夏の展示館寸描

被災船の追跡調査をすすめる高知の先生も
 久保山記念碑を囲む来竹桃が咲き誇ると、いつにも増して展示館も熱気がこもる。広島・長崎へむかう、都民生協、日本YMCAの代表団が、福竜丸の前で事前学習し、群集の渦の自転車隊が記念碑前で決意表明後出発する。
 高知・大阪・京都・埼玉・東京などの「平和のための戦争展」も

被爆40周年にふさわしく盛大で、代表が何回も展示館を訪ね、ピキニを忘れるなどたくさんの資料を借出す。高知の高校の先生は、地元の室戸を中心とするピキニ被災船の追跡調査をすすめる、数人の先生が次つぎに展示館を訪問、地元における熱心な調査が実って七月末記者会見で中間報告を発表した。

外国からもノルウェーの建築家フュロスさんが核兵器廃絶のシンポジウム出席のあと訪問、オスロのバイキング船の展示館とこの展示館は兄弟だと交流を深めた。
 夏休みと共に、見学者は急増。工事中の船を見つめ、仲良しグループで屈託なく、課題ノートの質問に答を書き込む船橋西高、大泉学園高校など、高校生が連日押しかけている。

編集後記

▼ロンゲラップの島民たちは放射能の影響を恐れ、故郷を捨て、集団移住した。日本でも、高知県の高校の先生たちによる被災船の追跡調査により、ピキニ事件によると思われる犠牲者の事実が明らかにされ始めている。元第五福竜丸乗組員の内、久保山愛吉さんの他にも川島正義さんと増田三次郎さんが肝臓障害で亡くなり、元弥彦丸乗組員平三義さんも肝機能障害などで、現在入院生活を送っている。

▼ロンゲラップの島民はアメリカ発表の残留放射能のデータより障害児の出産、甲状腺障害者続出などの事実によって、判断を下した。「医学上は証明できない」——この一言によって、問題が片付けられないことを願う(は)。

●100万人参観者運動を!

85年7月来館者数	3,317名
通算1カ月平均来館者数	5,160名
当月来館者数	128名
通算来館者数	567,641名

【連載】ヒロシマ・ナガサキ被爆四十年の中で (3)
忘れられぬ患者、ある被爆者の死

千葉 正子

昨年九月一日夜、病院から私宛に電話があった。当直医の沈痛な声が一週間前元気で外来受診した60才の独身被爆女性の急死を伝えた。その前日の定期受診に姿を見なかったのが気になったが、八月二四日の検査結果も全て退院時と変わりなく安定だったので、急死など寝耳に水で、死因も見当つかず、受話器を手に絶句した。独り暮らしの彼女は、当日戸の開かないのを不審に思った隣人により、蒲団の上を意識不明で倒れているのを発見され、近くの救急病院に運ばれたが、手当の甲斐なく永眠し、遺体は其処に安置とのことだった。

二〇日退院した。剖検では、同側の淋巴節、胸筋、胸膜などに転移が証明された。此等の予測された変化は急死の直接原因とは思われなかった。剖検がハッキリと死因として明示したのは予想外の著明な急性化膿性脳脊髄膜炎であった。脳全体を覆う黄色の膿汁を目的前にした私達は突然襲った悲劇に声もなかった。この突如の急変の原因は何かはいまに出来ない重要な点となった。その手がかりを求めて彼女の隣人から聞いた死の二三日前の行動が痛恨の針を私の胸に突き刺した。それは酷暑の八月三〇日に外出してあちこち買物をした彼女が隣人宅に立ち寄り品物を揚げながら、誰れそれへのお礼のためと言葉をばづませていたとのことだった。これを耳にして私は急死の原因を直感すると共に、あれ程無理せぬよう注意したのが通じていなかった口惜さと申し訳けなさが先立ったが、何が彼女をそうさせたかに思いをめぐらせないではいられない。彼女の求め続けた「核兵器なくせ」と被爆者援護法制定の原点が益々緊急の課題として広く盛り上げる被爆四〇周年の今年、彼女の一周忌も近い。(医師)

評議員に森一久氏
平和協会第66回理事会概況

▼日時 85・7・22(月)午後0時半〜2時
▼会場 東京・神田・学士会館
▼参加理事 三宅泰雄、川崎昭一郎、猿橋勝子、田沼肇、本多喜美、楡山義夫(委任状)
▼決定事項 (1)第65回理事会議事録承認、(2)前理事会以降の活動報告(略)、(3)当面の活動計画 (イ)船体修理にひきつぎ、事務所の拡張、出入口の改造その他、資料室建設への援助の三項目を中心に展示館施設についての要請を早急に都に行なう。(ロ)賛助会員の拡大、前理事会の決定にもつき「たより」読者を中心に加入と会費の増額を訴え32名の人々が訴えにこたえ、10人の加入があった。この成果をひきつぎ更にひろく訴えていく。(イ)核兵器完全禁止・廃絶をめざす国際学術シンポジウムへ参加、第16回原爆忌東京俳句大会を後援、久保山忌句会を協賛、9・23の各集會に協力、各地の戦争展へ資料貸出しを含む協力を行なう。(4)評議員選任 評議員に森一久(原子力産業会議専務理事)を選任、19人の新評議員による評議員会は11月末、理事会に引きつづいて開く。

水爆実験との遭遇

川井龍介+斗ヶ沢秀俊



出版された単行本は、連載記事のほか新たに被災当時の模様を詳細に再現し、廃船となりいま東京江東区の夢の島にある展示館に保存されている第五福竜丸の、悲しい運命を紹介している。私は焼津の、巡回記者”だった駆け出し時代に第五福竜丸事件にぶつかり、抜かれ記者のレッテルをはられた。

「水爆実験との遭遇」を読んで

かけがえのないプレゼント

小林利助

広島、長崎の被爆四十周年。核廃絶への祈りをこめる節目の夏に一冊の本を読んだ。このほど三書房から出版された「水爆実験との遭遇」である。

この本は毎日新聞静岡支局の斗ヶ沢秀俊記者と元同支局員だった川井龍介君の共著。ビキニ事件三十周年を機に斗ヶ沢記者ら二人が昨年一月から三月まで毎日新聞静岡版で連載し、話題を投げた「被ばく30年の第五福竜丸事件の周辺」の記事を再構成、加筆してまとめ

た。連載企画は、悪魔の光を見た海の男たちの貴重な証言、ビキニ患者としての三十年の生きざまをつづった「乗組員の軌跡」同事件にかかわった人たちの「事件史の証人たち」「非核への模索」の三部作で、「反核の平和」を強烈に訴え、日本ジャーナリスト会議(JCJ)の五十九年度奨励賞を受賞した。

「三・一ビキニデー」の暗い思いを胸に刻み、各地を転動して歩いた。どういう因縁か、三十周年を前にして毎日新聞静岡支局長に舞い降り、支局長や県下通信部同人との話し合いで、五十九年元旦付けから「被ばく30年・第五福竜丸事件の周辺」シリーズを取り上げることが決まり、斗ヶ沢記者ら二人が担当することになった。

歴史をひもとくような気持で、私自身たえず忘れたことのない事件ではあるが、旅から旅への転勤生活で、その後のビキニ患者の動向など知るよしもない。ましてや斗ヶ沢記者らは生まれる前の出来事。「夢の島の第五福竜丸展示館を訪れたこともなければ、乗組員が何人も知らない。乗組員は事件後どのような軌跡をたどり、今何を思っているのか、歴史をひもとくような気持で取材を進めた」と斗ヶ沢記者ら二人は「あとがき」に書いている。まさにその通りである。

この三十年間に二十三人の乗組員のうち久保山無線長ら四人が亡くなっている。斗ヶ沢記者らは健在の十九人の軌跡を取材するため県内はじめ九州、愛知、三重、岐

阜などに飛んだ。事前連絡をとりながら飛行機、電車、バスを乗り継いでのインタビューは強行軍だった。

「そっとしておいて欲しい」そんな乗組員も多く、みんな口が重たい。取材期間は限定されており、話が聞けないから「ハイそうですか」と戻るわけにはいかない、二人の取材はつらく厳しいものだった。

心の叫び一文字一文字に
陸に揚がったカッパの苦しみをなめた人。「結局は海に生きるしかなかった」と九州の小島で近海漁業に生計を託している人など乗組員とその家族の赤裸々な姿をとらえ、心からの叫びを一文字一文字にぶつけた。連載記事は多くの市民に水爆の恐怖と平和への願いをアピールした。

私はこの六月末で毎日新聞社を定年退職(現在スポニチ静岡支局長)した。この本は三十二年余にわたる毎日新聞の記者生活最後に後輩が贈ってくれたかけがえのないプレゼントだった。

(元毎日新聞静岡支局長)
「水爆実験との遭遇」三書房発行
定価 一、八〇〇円